

「見えないから」

2026年4月19日

ルカによる福音書 24章 13-35節

復活は信仰の根幹

4月5日は復活祭・イースターで、私たちは大勢の方とイエス・キリストの復活をお祝いしました。イースターは、イエス様が復活された、という単なる記念日として覚えるのではなく、私たちの罪のために十字架に架けられ復活されたイエス様を信じて、罪からの救いに与ったのだと、私たちの信仰の復活の時でもあるといえます。そしてイエス様の復活は、私たちの信仰根幹、神髄であります。伝道者であるパウロはいいます。「キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。」(Iコリント 15:14)。

私たち人間にとって本当に重要なことは何でしょうか。様々のことが挙げられると思いますが、神様との関係です。創世記に記されていますが、アダムとエバが罪を犯した時、神様は問いました。「どこにいるのか」(創世記 3:9)これは、地理的なことを指しているのではなく、「神様の前にいるのか、いないのか」という意味です。この問いは、旧約の時代のアダムとエバだけではなく、現在に生きている全人類に対しての永遠の問いでもあります。

私たちは今、このように日曜日毎に教会に集まっていますが、それは単に教えを求めているのではなく、また、聖書の教えや説明を頭で理解するためのものではありません。神様の御前で、「わたしは復活であり、命である」と宣言されたイエス・キリストという救い主の存在を信じて礼拝をお捧げしています。そして信じたように生きる、つまり復活のイエス様を信じて永遠の命の希望、天国を目指して喜びと感謝をもって生きるためです。この世では誰もが十字架を負いながら、時には身体や心の痛みを覚えながら、苦しみやどうにもならないやるせなさ、不条理等を感じながらも必死に日々過ごしているのが現実といえます。

そのような私たちに、「わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」(IIコリント 4:16-18)と記されています。素直に直ぐにそうだ！とは言えないものがあります。そんなこと言われても、この苦しみや悲しみが永遠の栄光をもたらすなんて考えられない、と。しかし、神様の御前に立ち、神様との関係で捉えられるなら、今、ここにおいて永遠の命に与っていることを確信することができ、心は永遠の希望へとへと心は変えられてゆくことを実感できます。私たちはイエス様を信じる者としてここに集められ、イエス様を信じる教会として、私たちは礼拝を捧げています。罪を赦され、永遠の命を与えられ、永遠なる御方を褒め称え、永遠なる神との交わりの中に生かされているのです。

エマオの途上で

本日の箇所は、イエス様が十字架に架けられてすっかりと落胆していた二人の弟子が、エルサレムから11キロほど離れたエマオという村に向かって歩いていた時の出来事です。そのような弟子たちに、イエス様の方から近づいて来られ、彼らと共に歩きました。彼らは復活されたイエス様であることに気づきません。「二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった」とだけ説明されて

います。しかし、既にイエス様は共に歩んでくださっており、彼らに働きかけておられたのです。次にイエス様と弟子たちとのやりとりが記されています。彼らは、イエス様に向かって、「あの方こそイスラエルを解放してくださる」と望みをかけていたこと。しかし、その方は十字架につけられ殺されてしまったこと。しかも、その遺体が無くなってしまったと。

イエス様はそれを聞いて、「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか」(25-26節)と。イエス様は彼らの不信仰を嘆かれますが、彼らが信じられるように、聖書を分かるように解き明かしてくださいました。「そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された」(27節)。

やがて、彼らは目指す村に近づきましたが、二人はなおも先へ行こうとされるイエスを引き止め、「一緒にお泊まりください」と語り、イエス様は共に泊まるため家に入れ、「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった」(30節)とあります。最後の晩餐で起こったことが、今、ここにおいても起こり、突然、二人の目が開けたのです。

見えなくなるから見える

「すると二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった」(31節)と記されています。目が開けて、見えるようになったのではなく、その姿は見えなくなったのです。私たちが今、復活されたイエス様のお姿が見えないように、彼らもイエス様は見えなくなりました。この箇所が本日のポイントです。彼らは、ここまでイエス様が共に歩んでくださっていたのだ、ということに気づいたということです。実は彼らが気づく前から、イエス様が共にいてくださった。そのことに気づいたので、目が開かれて「見えた」のはそのことでした。これらの全てのことは、イエス様の一方的な恵みの御業でした。私たちは目に見えるものではなく、目に見えない神様を信じています。これが信仰です。

先ほど申しました。「・・・わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」(Ⅱコリント 4:16-18) 見えるものではなく、見えないもの・・・神様の存在です。復活されたイエス様を信じないトマスは、「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」(ヨハネ 20:25) そのトマスにイエス様は、「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」(ヨハネ 20:29) と仰せになりました。とんち問答のようですが、見えないから、いいのです。見えないから信仰により神様が見えるようになるのです。

心が燃える

こうして、死んでいたような彼らの心に火が燃え始めていることに気づいたのです。イエス様が聖書を解き明かしてくださったところからの信仰復興の炎です。私たちにも今、聖書を解き明かしをお聞きして、十字架と復活の意味を悟らせてくださり、見えない神様のご臨在に心が燃えるのです。本日はこの後、聖餐式に与ります。イエス様のお姿は見えませんが、聖霊を通して私たちの内に、

御言葉の内に豊かにご臨在されるのです。ご復活されたイエス様と共にする食事です。そしてイエス様はこの聖餐式において、罪の赦しを受けるように、私たちも死に打ち勝つことを覚えるようにと、永遠の命を受けるように。と私たちを招いておられます。古代教会は、「キリストは本当によみがえられた」と言ってお互いに挨拶を交わしたそうです。それ程、イエス様の復活ということを大切にして来たのです。私たちもまた、今、ここに甦られたイエス様と共にいることを確信し、復活信仰に生きる希望を置いて参りたいです。見えないから見えるようになる私たちです。